ウズベキスタン旅行記

神田 順

目次

はじめに		•	•	• 4
1.	旅行前	•	•	• 5
2.	タシケント到着	•	•	• 6
3.	ヒヴァにて	•	•	• 7
4.	ブハラへ	•	•	• 9
5.	ワークショップ	•	•	• 10
6.	サマルカンドにて	•	•	• 13
7.	TTPUとナボイ劇場	•	•	• 15
8.	タシケントまとめの観光	•	•	• 18
おわりに		•	•	• 19

<無断コピーを禁じます。>

参加者: 神田 飲出 出野 二十 成 報田 報田 飲 十一 成 報

現地参加者:

箕輪親宏 (JICA/SV、全体コーディネータ) 秋葉 健(JICA/JV、ヒヴァ) 玉置琴奈(JFE エンジニアリング) Bakhodir Rahmonov(ウルゲンチ大学) Davron Matrasulov (TTPU) バブシャンタ (ガイド、ブハラ) 駒崎万集(JICA/JV、ブハラ) 古庄奈津子(JICA/JV、ブハラ) 浅川真喜乃 (JICA/JV, フェルガナ) 杉崎雄二(JICA/JV、フェルガナ) 宍戸麻里子 (JICA/JV、サマルカンド) サルビニッソ (ガイド、サマルカンド) Davran Otajanov (TTPI) 中村勝弘(ウズベキスタン国立大学) オリマ (ガイド、サマルカンド) グルバホン (ガイド、サマルカンド)

はじめに

すでに前期高齢者に達している 66 歳から 75 歳のエンジニアの男 5 人で、タシケントで JICA のシニアボランティア (SV) として活躍している箕輪氏を訪ねることとなり、2016 年 9 月 23 日から 10 月 1 日まで、現地で 7 泊 8 日の旅をした。逆上ること 2 年、2014 年 12 月 14 日、北千住での常磐線沿線の仲間の常磐会の忘年会が、箕輪博士のタシケント行の壮行会を兼ねていた。2 年間なら、一度くらい訪問してみたいと思ったのである。昨年の 10 月 23 日に、お茶の水 A-Forumにて、一時帰国の箕輪さんを囲んだ。そこで「季節のよい 9 月くらいには、なんとか訪問しよう」ということで盛り上がった。東京ソイルの大川出さんは、「自分は行けないが、連絡や旅行社対応をする」ということで話が進んだ。いざ行くという段階で、常磐会からは、黒田、水野氏との3 名となったが、まわりにも声をかけたところ、三輪、森田の両氏の参加を得て、今回の 5 人での訪問となった。

現地の箕輪さんには、何から何までお世話になった。もっとも、お世話にならなければ、言葉のこともあるし、全く動くことすらできない。立ててもらった計画は、今年5月にトリノ工科大タシケント校で開催されたワークショップを参考に、現地の大学関係者との交流も組み込んでいただいたので、観光+学術交流という欲張った内容になった。タシケントについては、ちょうど昨年の常磐会のあと、嶌信彦の新刊「日本人捕虜がシルクロードにオペラハウスを建てた」を読んで、オペラを観ることも必須項目に加えた。

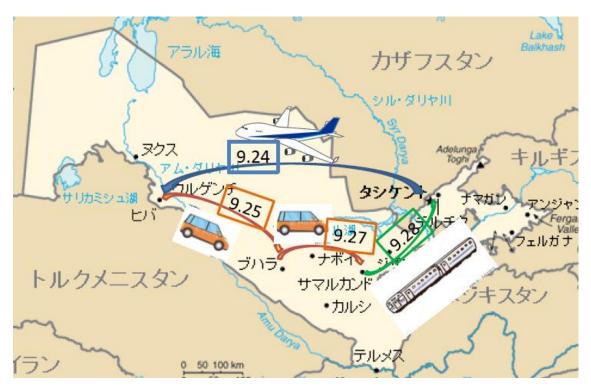
昨日、無事帰国し、写真を眺めたり、メールや資料の整理をして、ここに旅行記の形で記しておく。時系列での記録を基本に、やや個人的な思いも加えていることをお許しいただきたい。とにかく、箕輪さんには、この機会を生んでもらったことに、心から感謝する次第である。

2016年10月2日

1. 旅行前

企画が具体化したのは、今年の6月15日に、箕輪氏からスケジュールの提案があってからである。9月23日出発30日着という行程で、ほぼ、実現したものと同じである。ヒヴァ、ブハラ、サマルカンドと最も主要な3カ所を回り、ブハラとタシケントの2か所で研究集会を開催するという形である。実際は、その後、航空便の選択の過程で、仁川経由のアシアナ航空を使うこととなり、帰国が1日延びた。

ナボイ劇場の観劇のことも、高い優先順位でリクエストすることとなったのは、その昔、黒田 氏とヨーロコード関係のツアーを組んだ際に、ミラノでスカラ座のチケットが直前で高くて断念 したことの記憶もあってのことである。



元地震研の工藤先生や、理科大の井口先生も、もう一歩で参加されそうであったが、7月中旬に入り、具体的なスケジュールを見た上で、ハードだということで断念された。

ビザについては、TTPU の秘書の 01ga さんが段取りをしてくれて、先方からの招待の形のテレックスのおかげで、泉岳寺のタシケント大使館には、午前中にパスポートを持参すると、翌日には、領事のサイン付きのビザをパスポートに貼付して戻してくれる。8月末から9月にかけて、全員、実にスムーズにビザを受け取った。ただ、申請に行った、その9月2日に療養中のカリモフ大統領が亡くなったという報が入った。ソ連崩壊により1991年に独立したときの大統領で独

裁政権であったが、国民の支持は高いとのことである。大統領不在での治安に一抹の不安もあったが、もともと穏やかな国民性であると聞かされた。

箕輪氏からは、出発 10 日前になっても、Matrasulov 教授から連絡がないというので、こちらから、自分の話したいことを ppt にして送付した。すると、こちらの参加者の専門分野を伝えてあったこともあり、3 日後にワークショップのプログラム (案) が全員の発表タイトル付の電子ファイルで送られてきた。また、JICA メンバーや日本語のできる現地の案内ガイドの名前も含め、詳細な日程表と、先方の旅行社によるホテル宿泊、交通費の詳細見積もりも送ってもらった。

出発前日22日は、秋分の日、一日雨模様で、皆さんゆっくりと旅支度が出きたのではなかろうか。当日も朝は小雨がぱらついており、イベント前の恵みの雨に、心は落ち着いた。持参する本は、延藤安弘著「まち再生の術語集」(岩波新書2013年刊)。アクセス特急成田空港行は、2時間23分で馬込から運んでくれる。

2 タシケント到着

定刻 20:20 にタシケント空港に到着。日本円とドルの持参した金額を記入する。同じものを 2 枚書いて、1 枚控えに受け取る。帰りに持っている額が多いと没収されるのだそうだ。入国管 理も時間がかかり、全員そろうには1時間。

タクシーは、箕輪氏が交渉。一人なら 10 のところが 3 人だと 20。今日は荷物も多いので、25 という。ドルかと思いきや、1000 スムの単位で数えている。そして、公式レートが 1 ドル 3000 スムのところ、市場レートは 6000 から 6300 スムだと。ということで、まずは、各人 50 ドルを渡して、5000 スム札 60 枚と 1000 スム札 15 枚の札束を受け取る。

ホテル・グランド・ミーアは、なかなか快適であるが、三輪氏の部屋のカード式のドアが、なかなかうまく開けられない。5回のうち、ホテルの人に頼んだのが2回、私が2回、森田氏が1回、三輪氏は1回だけ。ホテルのバーで無事到着を祝って乾杯。ウォッカの上等なのを注文すると、三輪氏がおいしいとお気に入り。

明けて24日の朝は、朝食の後に、三輪、黒田と3人で散策。裏に回ると、大きな邸宅風であったり、銀行の看板が出ていたり。そんな中に、ミニ・マーケットと書いてある雑貨屋さん。前の歩道には、ハーブやペパーが植えてある。大通りは、歩道が、車道より1mくらい高くなって、ゆったり車も止められる幅もある。面白いのは、街路樹のすべてに足元1mほど白いペンキが塗ってある。虫よけらしいが。バスの停留所も、新しい屋根付きでガラスの壁で囲まれたものがおしゃれ。太い木の幹が屋根を突き抜いている。歩道部分は、舗装がまちまちなのは、どうやら、各お店の責任で舗装をしているようである。

13時発の飛行機で、ウルゲンチへ。空港で、JICAボランティアの秋葉さんがヒヴァに戻るところで、ちょうど会う。日本人で一人旅の玉置琴奈さんを見つけおじさんたち声をかける。やはりヒヴァへ行くというので、仲間に入ることに。昼食は、機内でのパン1個とコーラ。ウルゲンチからヒヴァへは、タクシー3台で約30分。



タシケント市内の雑貨屋さん



おしゃれなバス停

3. ヒヴァにて

ホテル・アジアは、ヒヴァの城壁の南門の前にある。中庭には、プールやバーがあり、離れの 2号棟に宿泊。おしゃれなホテルである。

箕輪氏の先導で、門をくぐると、中は、16世紀の世界。アドベレンガ積みに土壁を塗り込めた家並みと、モスクが対比的。土壁をこねている人、笑顔で声をかける子供たち。家の前にならんでいる刺繍模様の帽子、4000 スムというので、すぐに購入。ペットボトルの水が1000 スムである。ほとんどただの水を、工場で作られて容器に工場で詰めるのだから、人件費などわずかだと思うのに、日本で100 円近いものが、15 円とは理解に苦しむ。タクシー代にしてもそうだ。近くだと4000 スムとか5000 スム。日本の700 円の10分の1。2 km走ってガソリン代だと20円。ウズベキスタンは、天然ガスを生産し輸出もしているということで、これでも、人件費は出るということか。

夕食は、5 時くらいから秋葉君の住まいの大家さんの経営するお店で秋葉、玉置に合流。ビールを4種類出してもらって、乾杯。野菜がいろいろ出て来る。パンは、店の釜で焼いたもの。年長者が手でちぎって配るのだと言う。きれいなお皿も紺の模様がおしゃれだ。きれいと言っても、土埃があるので、使うまえには、紙で拭くのが習慣。肉じゃが風や、ピーマンの肉詰めや、牛肉添えのピラフもおいしい。店は、蒸留酒の免許は取っていないので、お茶碗に、白いお茶(オク

チャ)と言って、ウォッカを注ぐ。まだ8時前なのに、足もふらついて、暗い夜道を歩いて、帰る。誰かさんが、ぬかるみに足を取られ、靴を汚した。北斗七星がくっきり光っている。

2時半に目を覚まし、シャワーを浴びるが、なかなかお湯にならない。冷えたからだを毛布でくるんで朝を待つ。6時に起き出すが、まだ暗い。フロントで日の出を尋ねると 6:50 と言う。朝食はもう始まっていると言われ、まず食べてから、スケッチブックを持って、明るくなりかけた 6時 40 分くらいに、出かける。昨日見た景色のところで、3 枚ほど描いてみる。

9時には、現地にわざわざ来てくれたウルゲンチ大の先生、Rahmonov 教授が通訳のための学生を連れて現れる。秋葉、玉置の2人も一緒に、説明を聞きながら城内を回る。地下水位が高いので、基礎部分から床上に湿気が来ないように、遮水層を作っているとのこと。材料は、古いものは、葦のような茎を、最近のはアスファルト・シートか。そして、それが地震に対しての免震効果もあるというが、全員、首をかしげる。壁は、レンガだけでなく、木材の柱や場合によっては、ブレース材も配置。梁とブレースは、孔をあけて差し込んで引っ張りにも効くようにしていると言い、その現場を見せてくれると、ぐるぐる回って行ったところは、すでに壁が塗られて見えなくなっていた。向かいの建物には、中国政府の援助による修復の看板が出ていた。ミナレット(塔)は、モスクの横に必ずあって、ブルーのタイル貼りが美しい。規模の小さいものは、住宅様の建物の横にもみられる。ヒヴァは、ウズベキスタンでも最も早い時期に世界遺産登録がされたという。神学校がホテルになっている建物は、メンテナンスも行き届いている。町の中全体が、土産物売り場という感じ。

お昼は、12 時にならないと食事を出さない規則になっているようであるが、無理を言って、早めに出してもらう。10 人で賑やかに卓を囲む。ビールが美味しい。12 時半に車 2 台がホテルで待っているが、小さい乗用車で、1 台は助手席に大きな荷物を乗せて、黒田、三輪の 2 人の間にも荷物。われわれは、水野氏を助手席に、後ろ箕輪、森田と 3 人ですし詰めで、出発。

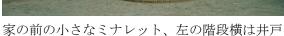






Tea House の夕食のテーブル







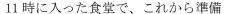
元神学校、今はホテルの中庭

4. ブハラヘ

ヒヴァからブハラが最も大変な行程と言う。砂漠の平原をひたすら走る。たまに舗装が良くな ると 100 km/h 以上出せるが、けっこう凸凹で、また、草を積んで、ゆらゆら走るトラックや大 型トレーラーもあって、60 km/h が精一杯のところが大半。州の境では検問があって、時にはパ スポートの提示も。トイレ休憩は、おばさんに 500 スム。だいたい 1000 スムより小さい額のお 札は持っていないので、1000で良いことにする。

トイレを終えて、快調にスピードが上がるが、ドライバーに窓を閉めないので、「Air condition, please」と言った瞬間、警官が飛び出して来て、「止まれ」の合図。シートベルトをしていない からかとも思ったが、どうやらスピード違反らしい。警官は一人だが、スピードガンのようなも のを持っている。砂漠の炎天下でご苦労様だ。反対車線の向こう側のパトカーのところでしばし。 お金も持っていったが、効き目はなかった模様。15分くらいの間、森田氏と、砂漠の様子を見 る。足跡がいろいろ見える。ウサギのようなのが居るのだろうか?細い線の跡もあるが、サソリ のしっぽ?いくらの罰金かわからないが、あまりそんな話題もできなくて、ひたすらブハラを目 指す。時には、牛の一郡が横断していたりもしている。7時、暗くなってホテルに到着するが、 当初の Asia ホテルは予約が一杯だったようで、3 人ずつ分宿。神田、黒田、水野が Marika ホテ ル。地元の人のお薦めのレストランがなかなかみつからず、夕食は8時を回る。ベランダの2階 でさわやか。大きな串に焼き鳥風のもの。長旅の後、ビールで美味しく頂く。ウォッカも頼むが、 1本は飲みきれずに持ち帰る。黒田、三輪、森田の3人はMarikaホテルの中庭のバーで、遅く までワインを飲んだという。







運転中のドライバー、右の頭は水野氏

5. ワークショップ

翌朝 26 日は、9 時 Marika のロビー集合。歩いて 5 分もかからないので 10 時集合の Asia ホテルには、早く着いてロビーで待つ。まず、バブシャンタさん現れて、自分で朝、焼いてきたというサムサを持って来てくれる。全員一口ずついただく。美味しい。Matrasulov 教授も現れるが、誰が来てくれるか、まだわからないという。ブハラ大の先生が長老の Ismat Mushinov 師という、ミナレットの修復にかかわったという方を連れて来てくれる。

初めに教授からは、トリノ工科大タシケント校の紹介。その後、一通り、こちらの発表を予定どおり、神田(建築基準と規制)、森田(小学校の構造設計)、三輪(ECS 杭とエア断震)、黒田(確認審査と新宿御苑御料亭の耐震補強)、水野(振動台実験と相似則)の順で ppt を使って話す。学生が初めは 6,7 人来てくれたが、神田の発表の直後に引き上げてしまった。午後の授業に出るためらしい。結局、先方はブハラの建築物のソ連時代から壊されたものの修復のことをブハラ大の先生が通訳して説明したうえで、「Unknown Masterpiece of the History」というウズベック語、ロシア語、英語の 3 か国語で書かれたブハラの建築を紹介する本を頂く。独立 22 年を記念して 2013 年に出版されたもの。A4 版 138 ページで写真も豊富。ミナレットについては詳しく、17 の塔について説明がある。Matrasulov 教授は、2 日後に始まるエネルギー関係のシンポジウムの準備が忙しいようで、電話で部屋を出たり、入ったり。終わると 2 時。ホテル内で、Matrasulov 教授不在のまま、われわれ 6 人と先方の二人とで食事。

午後は、我々と日本語の堪能なバブシャンタさんに、箕輪さんが五重塔の耐震の話。そして、バブシャンタさんは、歴史で学位を取り、学校では子供たちに歴史を教えているということもあり、ウズベキスタンの歴史と文化について、30分ほど、講義をしてくれた。建物の正面には、アラビア語で作った人の名前とか、言葉とかが書かれている。俳句のように5-7-5の音節に

なったりしているそうだ。「考えが浮かんだら言葉にし、言葉を発したら行動に移す」というのもあるそうだ。そして、市内めぐりでは、公園にあるロバにまたがるドンキホーテのような像についての説明。女の子が品物を見ていたら、「お前はタダで見た。カネを出せ」というところに、その人が通りかかり、「私がコインを上げよう」と言って、コインを落とした。そして「お前は、コインの音を聞いたから、カネをよこせ」と言って、女の子を救ったと。6時を回り、疲れて一人先にホテルに戻る。

夕食は、ブハラに居る日本人と、エネルギーの会議に出るロンドンの Imperial College のロシア人の先生も一緒。Matrasulov 教授が段取りをしてくれた大きなレストランの中庭を見渡す 2階。日本人は、めちゃくちゃウズベック語で自然にしゃべるブハラの小学校の音楽の先生をしている音大出身の駒崎万集さん、日本語の先生の静かな古庄奈津子さん、フェラガナで JICA 隊員をしている看護士の浅川真喜乃さんと理学療法士の杉山雄二君。フルコースディナーでとても食べきれない。浅川さんと杉山君は古庄さんの家に泊まるのだとか。おじさん達は、若い JICA 隊員を誘っていたが、お酒の好きな駒崎さんも、明日の授業もあるからと帰る。ホテルの中庭のバーで、またワインを注文して飲み始めると隣の部屋から「I am sleeping」とクレームが。ネットの環境はかなり悪くて、メールやフェースブックを諦める。

翌27日も Marika ホテル 9 時集合というので、その前にまたスケッチブックを持って、外へ出て 2 枚描く。バブシャンタさん来て、Taxi2 台で、スイトラ・マヒ・ホサを見学。スイトラは星でサマルカンドのシンボル。マヒは月でブハラのシンボルだと言う。ソ連に併合されるまで王の夏の宮殿であったと言う。ナボイ劇場の設計と同じ建築家の設計による豪邸は、一見ちいさなベルサイユ宮の鏡の間のようでもある。王はナルシストで、自分の顔を見て満足していたとか。有田焼が気に入って沢山手に入れているが、8割は中国製の模造品だという。ロシア人の王妃のための建物は、結局一度も住んでくれなかったのだという。虚しく、王妃の衣類などが陳列されている。そして、池の前のハーレムには側女が30人。プールで泳いでいるところにリンゴを投げて、共にする娘を決めたとか。暑いが、一休みできる喫茶店もない。







鏡の間

また、タクシーでアルク城へ移動。スムが足りないということで、タクシーの運転手の友達に両替を頼む。アルク城の前で、一人 20 ドル 12 万スムずつ 5 人両替。昼食の時間もあり、城は外から眺めるのみ。ところが、そこで黒田氏、ラクダに乗った写真を撮って気分よくした直後に、よそ見をして転倒。カメラをかばって、石畳で眉間を切る。バブシャンタさん、大型バスの運転手からバンドエイドもらって、貼ったり、露店のおばさんは、冷たいペットボトルを持って来て、「冷やせ」と言ってくれたり。昨日の説明で聞いた 47m のブハラで 1 番高いミナレットと神学校を覗く。7m のところで一度建設を中断して、何年かして再開したのが、強度を増したことになっていると言っていた。ここでバブシャンタさんは、午後の授業で学校に戻る。



道端での両替風景





ブハラで1番高いミナレット

< アルク城の城壁はしっかりしている

昼食に、浅川、杉山も呼んでいたのであるが、「杉山が足を蜂に刺され、その対応で遅れる」との連絡が入る。ホテル Marika の昼食は、ウズベキスタンで初めての魚料理。川魚のスズキのようなものか、なかなか香味も効いていて美味しく食べることができて、皆、満足。昼だからとはいえ、普段ならビールなのに、黒田氏は怪我で自重、三輪氏は2日間の夜の酒で満杯、珍しく我一人気持ちよく飲ませてもらった。食事の終わったところへ浅川、杉山の二人が来て、早速、黒田氏に問診。今日は、看護士が大活躍と言うことに。集合写真を撮ったあと、ホテルロビーで

1時間ほど休んでから、3時に、また2台のタクシーでサマルカンドに向けて出発。今度は、大き目のワンボックスカーで、3人ずつゆったり乗れたものの、運転手の態度がいまいち。しかも、道の舗装もヒヴァからの道と変わらず、凸凹で、後ろの席でも揺れに構えるためにずっと前を見ていた。4時間かかり、Registan Plaza ホテル。サマルカンドで一番大きな、アトリウムのあるホテル。JICA の宍戸さんが待っててくれた。





皿を飾った壁を背景に集合写真、ホテル Marika

夕食の前にレギスタン広場のライトアップ (提供: 宍戸)

6. サマルカンドにて

夕食の前に、ライトアップのレギスタン広場を見に行こうとタクシー。途中ティムールの像なども見える。ライトアップはさすがにすばらしい。そして、夕食は、地ビール Pulsar の店でサラダに焼き鳥。宍戸さんは、福島出身。大学で観光学を学び、サマルカンド大学で地域観光のあり方を教えていると言う。いつもは Tourist Information Centre にも居て、実践もしているという。まち歩きや体験ツアーなども企画して、日本語で楽しむというパンフレットももらった。これは、唐丹小白浜でまちづくりのプロジェクトにも大いに参考になりそうである。

翌29日は、9時に宍戸さんにも世話になっているというサルビニッソさんが来て案内してくれる。今日は、全員の乗れるマイクロバスで1日回ってもらえる。疲れも溜まって来たこともあり、またネット環境が良くなったこともありで、三輪さんと12時までホテルで休憩させてもらう。12時、宍戸さんも来て、お昼は、韓国料理。地球の歩き方にも最新版で紹介されている人気店。ビビンバを食べる。

レギスタン広場でゆっくり見て回る。メドレーセ(神学校)が3つ。広場正面の左手がウルブルクで1番古く、右がシェルドルで200スム札にあるライオンの絵が正面に見える。真ん中は最後に建てられたティラガ。外から見ると神々しいが、中に入ると、学校の教室の他に個々の2

人部屋になっており、1階で勉強、2階で寝たのだというが、それが今は、土産物屋にあてがわれていて、1階が店で2階が倉庫兼陳列棚。ひとり最後の1枚のスケッチと思い、場所を探していると、地元の中学生か、女子学生が寄ってきて、「写真を一緒に撮っても良いか」と。なんだか、浮き浮き気分になるが、おかげでスケッチの方は、手がうまく動かない。まあ、タイルのモザイク状のものは、ボールペンのスケッチには似合わないようにも思った、というのは言い訳。玉置さんも大きなカメラを抱えて、一人回っているのに会う。サマルカンドに泊まって、明日タシケントから我々と同じ便で日本に向かうと言う。

タシケント行の列車は、当初5時発の新幹線だったつもりが、旅行社のくれたチケットは、何と18:30 発のもの。箕輪氏は、タシケントに8時前に戻って、世話になった人を空港に見送らねばならない、ということで、旅行社に交渉。水野氏と二人、タクシーで4時に出発する。残り4人には、ニッソさんがしばし付き合ってくれる。

まず、広場周辺を回っている観光用のかわいいオープンマイクロバスに乗りこんで、ティムールがインド遠征に勝利して造ったというビビハニム・モスクとショブ・バザールを見る。そして、シャーヒズィンダ廟群を回る。周囲も新しい墓のあるアフラシャブの丘。7世紀にイスラム教を布教して活躍したが殺された師を偲ぶ場所で、11世紀以降、ティムールの妻や子供たちの廟も、少しずつ様式を変えて建てられている。途中、36段の階段は、行きと帰りに数えて同じ数であれば、夢がかなうと言う。みんな、数を数えながら登り、降りる。一番奥の廟は、室内には新しいシャンデリアもあって美しい。

5時にホテルに戻り、ビールとサンドイッチを用意してもらって、ニッソさんに駅まで見送ってもらう。表示がなく不安ながら、人が増えてくる。15分前に列車は入り、2号車に乗りこむと、すでに座席は人が座っており、オーストラリア人らしきが、「オーバーブッキングだ」と騒いでる。発車間際になって、添乗員が大きな声で「間違っていた7号車まで下りずに歩いてください」と叫んでいる。コンパートメントは、3人と1人に分かれる。サンドイッチは美味しかったがビールのせいか、何だか頭がふらふら。向かいに座るトルコ人は、ロンドンとタシケントでTextileの仕事をしているのだと。定刻9:16に無事タシケント着。タクシーもすぐつかまって、ホテルに10時前に着く。荷物はタクシー組が運んでおいてくれたのは、大変に助かった。



シェルドル・メンドレーセ



地元の学生に乞われての写真





アフラシャブの丘の36段の階段

シャイ・ズィンダの廟群

7. TTPUとナボイ劇場

前の晩は、箕輪氏が空港の見送りから、タシケント在の JICA の仲間とともに戻って、また宴になったというのであったが、私はその頃は、風呂につかっていた。

29 日朝はゆっくりで、10 時過ぎにトリノ工科大タシケント校に到着し、用意された部屋で開始を待つ。プログラム「On the problem of seismology and seismic security in Uzbekistan」も用意されていて。11 時開始予定になっているが、先方の先生方が揃わず、早く出る先生もいるというので、11:10 になって、また、神田から始める。ブハラよりは、少し短めに30分ほどで。次いで、三輪は、エア断震を、いつだったかの酒の席で英語を考えようと言って名づけた「Seismic Air Floating System」と紹介。そこで先方も全員揃い、Matraslov教授はまだブハラなので、その助手のDavron Otajanovから、大学と耐震研究の概要紹介。

Abdurashidov 教授からは、ウズベック語で11世紀から15世紀ころに建てられて、地震にも耐えた建物に隠された職人技について、スライドと共に紹介。Davron さんが通訳してくれる。要約すると elasticity と homogenuity が煉瓦組石造ではあっても地震の揺れを最小限にして熱エネルギーに変換することで耐震的になっているということのようだ。まだ完全に解析しきれていないが、今後の課題でもあると。

その後、コーヒーブレークを取り、再開後は黒田、森田、水野から、やはりブハラでの発表を少しコンパクトにして 20 分程度ずつで発表。次いで Ilias Aripov 氏からは、地震観測網とデータ処理系の成果の話。すでに 2 年以上にわたり、ウズベキスタンおよび周辺国に地震計を設置し、自動的に震源やマグニチュードも計算している。マグニチュード 8 以上が複数もあったというのは驚きである。地震予知につなげる方向の研究になっているということであったので、日本では、東海地震が予知研究ということで長年展開したが、最近は予知は無理ということが大勢の見方に

なっていると紹介。さらに箕輪は、TTPUで製作中の振動台の概要。3 時近くなったので、まずは、 昼食を。大学の外の食堂で、肉まんじゅう2個とスープ、一人4000 スム(60円)。

再び大学に戻り、奥の実験棟に向かう。校内は芝にスプリンクラーが散水して緑がよく手入れされており、コウノトリも散歩している。大きな実験棟は、ソ連時代にタシケント地震の後に反力壁を作って、ほとんど実験しないうちに放置されていたものだという。手作りの振動台。1機のアクチュエータでどこまで捩れを抑えられるかと言う問題はあるが、500 kgくらいまでは揺すれる予定と言う。今日の段階では、煉瓦ブロックを載せてのデモンストレーションまで。





実験棟内部

手作りの振動台

ホテルに戻りたい組と、直接ナボイ劇場へ行く組とに分かれて出発。大学前の2人組のタクシーは、ホテルも劇場もわかったようなわからないような物言い。箕輪、三輪、神田で劇場に向かうが、ホテルに向かったと思えば、またぐるぐる方向が定まらず、箕輪氏、心から怒りの声を発するが、ドライバーは涼しい顔。これがウズベキスタンのタクシー事情だ。

アリシェフ・ナボイ劇場は、最近、改修したばかりということもあって、見事な造り。玄関前のチケットブースでS席30000スムを6枚求める。つながったままなので、「切ってほしい」とジェスチャーでお願いするのだが、「これが一番良い席だ」と言う答え。確かに、自分でちぎれば良いだけの話。切り離して渡す、という概念が存在しないようだ。横に回ると、「日本人捕虜が作った」という言い方を「数百名の日本国民が」という表現に改めた大理石の大きな銘盤が、その周辺を美しい模様で飾られている。

演目は「Heaven of Fondness」で、ウズベキスタンのロシア人が作曲した新しいオペラのようである。箕輪氏も3回目だが、一番良かったと言われるように、正確な筋はわからないが、2時間半、すばらしい演出も舞台装置もで、満足だった。途中も何度もバリトン・ソロに「ブラボー」の声もあった。女声は、やや声量不足。やはり建物だけでなく、使われている空間の中に自分たちが入れたことが満足感を高める。

おそらくの筋を想像する。ティムール時代の天文学者の話だろうか。周りから馬鹿にされながらも頑張って成果を上げて、星座を作る。星の精たちは、バレーで表現。王様の前では、ベリー

ダンスも登場。同時に、許嫁が何かの理由で一緒になれない。そして最後は、事業は完成するが、 許嫁は心無い男に刺されて殺される。 ロシア語だけのパンフレットを 2000 スムで求めたので、 いずれ確認してみたい。

劇場は市の南部にあるが、センター地区のピザハウスに移動。中村勝弘先生をご紹介いただく。 東大の2年先輩で、理学部物理学科卒。大阪市大で先生をしていたが、研究以外の煩わしさから、 退職して、JICA ボランティアに応募。タシケントで4年暮らした後、ウズベキスタン国立大学 の先生として現役で、活躍中。ワープ理論のようなものでナノの世界では理論的に可能であるこ とを示した論文を発表。「最新の Physical Review Letters に発表した論文のアクセスが凄いん だ」と嬉しそうに語った。もしかすると、太陽系にもっとも近い恒星を回る地球のような惑星が 4光年の距離にあるが、そこに数時間で行けるというようなことが起きるかもしれないと。

ホテルに戻り、最後の晩は、最初の晩と同じように、三輪氏にご馳走になり、バーでウォッカで語る。実際はなめただけだが、十分に酔って、個性豊かなお互いを論じた。



アリシェフ・ナヴォイ劇場

グラン・ミル・ホテルのバーで

8. タシケントまとめの観光

最終日9月30日。9時チェックアウトすると、背の高いオリマさんと小柄なグルバホンさんが来ている。箕輪氏も来て、タクシー2台で日本人墓地へ。ここもタクシーは場所がわからず止まっては、土地の人に聞きながらの到着。

立派な門があって、ポリスが 3,4人で荷物チェック。公園のように整備され、モスクも新しそう。日本人墓地の区域は、おばさんたちが落ち葉を掃いている。もう 20年以上やっているのだと。線香の話をすると、出してきてくれるが、マッチがないので、般若心経を唱えるのみ。70

人のプレートを一通り見て回る。岐阜県人は一人。新しい墓石も多いが、四辺形で上が広がった 斜めの形になっているのがおもしろい。しかも、生前の顔写真を石に刻んでいるのだ。一人一人 に大きな石を立てていては、広い公園墓地もすぐに場所が足りなくなるだろうに。近くの記念館 も訪問して、サインしてくる。

「チャソバザールの傍で蕎麦を食べよう」などと、駄洒落を言って、タクシーで大きなバザールへ。また最後の両替も。果物、野菜やら衣料品やら大きな野外の市場。ドームの中は、生肉やナッツ、干し果物の店。自分たちで作ったものを持ってきて、売っているのが商売の原点。そばと思ったがタクシーで5分。ウズベック料理の店で、焼き蕎麦を食べる。量が多いので満腹感が出て、全員残してしまう。もうすぐ結婚するというオリマさんは今日が誕生日だと言う。それならと、ケーキを、注文して、みんなで Happy Birthday を歌う。素直に喜んでくれるのが良い。グルバホンさんは、2日後に福岡大で語学の勉強に行くのに、カード会社から電話が来て、中座。歴史博物館へ。独立記念公園の近くにあって、少し小高くなったところに建っている。1階は、ネアンデルタール人、ホモサピエンスからペルシア、そしてチムール帝国へ。2階は、25年前の独立から経済成長のグラフ、天然ガス工場の模型、カリモフ大統領の、どこの国とも軍事同盟を組まない形で、遂げた成果が示されている。これからどのように展開して行くのだろう。

独立記念公園にある母子像と戦士を待つ母の像も、故カリモフ大統領の政治観が見られる。父親とお姉さん小学生の男の子二人の家族から、「一緒に写真を撮って」と言われる。これは、この国では、女子学生だけのことではないのだと、理解する。公園の中の木には、白ペンキが塗ってないことを発見する。地下鉄にも乗ってみる。荷物検査が面倒。運賃は、1200 スム。もはや200 スムなんて札も持ってないが、5人だと5000 スムと1000 スム1 枚ずつで、ちょうど良い。年10%のインフレは大変だが、これもこれからどうなることか、一抹の不安もある。

喫茶店があり、小休止。ホテルに戻り、空港への入り方を箕輪氏からレクチャーしてもらって、荷物も大きいので3台のタクシーに分乗して出発3時間前に空港に入る。最初の入り口が、荷物をたくさん持った韓国人、ウズベキウスタン人でごちゃごちゃ。押し合いにはならない程度で、何とか30分ほどで、全員空港内に入ることができた。チェックインの後、黒田、水野、森田、有り金を全部だしてもビールが4本買えない。15000スムで瓶1本、10000スムで缶1個。4人で分けて乾杯。また30分かけて出国カウンターを通過して、ゲートに向かうと三輪氏が「一人寂しく、1時間待っていたよ」と。

10時20分発は、10分遅れで出発。仁川まであっと言う間。眠い目をこすり、成田行きまでは、 1時間もない。玉置さんは、機内で体調を崩し、医務室にいるとの情報。来るときの成田でのお 土産の日本円の精算をして、全行程終了。成田で流れ解散。





タシケントの日本人墓地

チャソ・バザールにて

おわりに

帰りも成田でのJRの接続が悪く、アクセス特急に乗ることとなった。1時間半で馬込まで乗り換えなしは同じ。歴史博物館で求めた「SAMARKAND」(20000 スムの現地通貨を節約するため10ドルで買った。レート3倍)と延藤氏の岩波新書をぱらぱらとめくりながら。家のドアを開けると、家内が「テレビでウズベキスタンやっている」と言う。加藤九祚の追悼番組であった。1998年からウズベキスタン科学アカデミーと共同でテルメズ郊外の仏教遺跡発掘に関わり、ウズベキスタン政府から勲章を受けており、この9月に発掘中に倒れて94歳で死去。そういえば、私のフェースブックの投稿に、山田利行氏から加藤先生の追悼にウズベキスタンに向かうとコメントがあった。

いろいろな人との出会いに感謝である。文化の不思議を感じる旅であった。箕輪さん、本当にありがとう。JICAの若い人たちが、自分の求める仕事を見つけて、新しい楽しい世界を作ってくれることを祈ってます。

ウズベキスタン旅行記

2016年10月6日 発行

製作・著作: 神田 順

連絡先:

101-0062

東京都千代田区神田駿河台1-5-5

レモン パートII 5F A-Forum

Tel: 03-5281-7880